

令和四年七月七日(木)

青少年センターにて対面句会を行う。

宮原 凧

カフェテラスの椅子に掛けたる麦わら帽

天女にも魔女にもなれず金魚飼ふ

新しきスニーカーで駆くる夏木立

誰の灯か遠く近くに夕蚩

十葉の白を極めり梅雨滂沱

高橋 由紀子

新居訪ふ向日葵十本束にして

遠太鼓縁日の金魚と早や十年

梅雨晴れ間ゴーヤのネット繕ひぬ

老犬のかすれ軒や夏の小夜

祭提灯ぼんやり雨の商店街

首藤 しずを

白日や路地に金魚の跳ぬる音

灯が入り弾くる祭太鼓かな

一日を灯影に残し夏の川

水草の泡に寄りくる金魚かな

電線の陰をも恃む極暑かな

松田 一文字

呼び声の路地に響けり金魚売

闇深し烏賊釣船の灯の揺れて

薔薇巡る中に真紅のバーグマン

日高し猫のまどろむ海の家

神域の木漏れ日纏ひ黒揚羽

長尾 進一郎

父の日と知りて遠出を控へをり

灯台の灯の廻る間や暑き闇

この池の外を知らない金魚かな

足音の度に寄り来る金魚かな

草も木もその場で耐へる早かな

大津 そうかい

はまなすや灯台とうに無人化し

水中花交はりふいと絶ちし友

新辣韭の光摘めり箸の先

縁日の金魚知らざる己が明日

マスクせるキリンライオン夏の夢

新田 ゆふき

ホタルブクロ灯明めきて梅雨の間

もぐら塚天辺乾き梅雨晴れ間

雲の峰夕映え灯すスカイツリー

夕の雷金魚一閃腹光る

知る人の墓見つからず梅雨の寺

志村 良知

幻灯機夏の夜の夢妻若し

男独居金魚の餌を手造りし

そぼ濡れて金の滴り未央柳

己が陰五寸に縮む炎暑かな

せいせいと枝伸ばしみて額の咲く

森田 元斐

少年に河原は狭し夏旺ん

灯に揺れる帷子素浄瑠璃

パトカーの警めの声炎ゆる街

宅配の呼ぶ声せはし昼寝覚

残り陽へ金魚のあぶく独り酒

中村 晃也

山小屋の灯油の匂ひ夏の星

樹木葬埋めし金魚の数いくつ

木漏れ日や吸い殻の浮く金魚池

梅雨明けや灯台の白海の青

畑中の瞬き多き誘蛾灯

安藤 晃二

きりり立ち花房たわわアカンサス

海荒るる天草匂ふ浜歩く

蜂に追はれ脱兎の道の油照り

アスファルトから熱気むんむん金魚買ふ

屋形船に女将の立ち居灯涼し

内藤 まりこ

里帰り母のつくりし冷やっ汁

琉金や尾びれの揺れてハワイアン

煌めきて星蛍（ホタル）とまごう台場の灯

巣燕や駅舎の天井糞囲い

焼き茄子や舌に親しき夕餉かな

浜口 須美子

「会いたい」と短冊の文字星月夜

三伏や木つ端みじんに夜景の灯

内外を隔つ歪みの金魚鉢

溜息はけふの鼻歌夏は来ぬ

街無音媪も金魚も目を瞑る

西川 知世

ビーチバレーコート空っぽ土用波

対岸にビル置き台場灼けたる

羽広ぐ鵜に届きけりシャッター音

握手して別れ来し街夏灯

金魚鉢訪問帖に名を記し

次回は令和四年八月四日（木）、

兼題は宮原凧さん出題の「炎天」、

席題は西川知世さん出題の「晩」  
です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

八月の兼題は、炎天。真夏の荷盛りの、暑く灼けつくような空、天気を言う。近頃の天候、季節の移り変わりは近年少しばかり変化して激しくなっていると思うのは私ばかりではないだろう。今日、この原稿を書いているとき、ニュースでは、線状降水帯という言葉が繰り返されている。暑さに関してとも言葉が増えて、「日盛り」は正午ごろから二、三時ごろまでの時間。「早」は連日の炎天で小雨さえ降らない旱魃を招く。「油照り」は太陽が照りつけ、いささかの風もなく、息づまるような蒸し暑い照りだそう。「灼くる」は万象の灼けることをいい、雲灼くる、路灼くるなどを使う。意味はただただ暑いということ。

炎天に蓼食う蟲の機嫌かな	一茶
蓮の風立ちて炎天醒めて来し	花蓑
炎天を槍のごとくに涼気すぐ	飯田蛇笏
炎天に怒りおさへてまた老うも	大野林火
炎天の號外細部よみ難き	中村草田男
炎天に嘆き一すぢ昇り消ゆ	文挾夫佐恵
炎天の梯子昏きにかつぎ入る	橋本多佳子
炎天の蔽の裸子やはらかし	飯田龍太
炎日の庭石重み失へり	林 翔
炎天となる一隅の雲たぎち	能村登四郎
炎天へ打つて出るべく茶漬飯	川崎展宏
原爆ドームがこんな身近にある炎天	山下裕康